

とりたて助詞の機能と解釈：量的解釈を中心にして

著者	野口 直彦, 原田 康也
雑誌名	制約に基づく日本語の構造の研究
巻	10
ページ	145-166
発行年	1996-01-31
その他のタイトル	Toritate joshi no kino to kaishaku: Ryoteki kaishaku o chushin ni shite
URL	http://doi.org/10.15055/00005484

とりたて助詞の機能と解釈

—量的解釈を中心にして—

野口 直彦

原田 康也

概要

日本語のいわゆる「とりたて助詞」は、英語の *focus particle* に相当し、文中に現れるある要素をとりたてて、その要素に対照的な事物の集合についての限量を行なうという機能を持つと考えられるが、その際に、その集合中に、ある種の序列（順序）構造 (*scale*) を前提とする解釈を生み出す場合がある。本稿では、そのような解釈を量的解釈 (*scalar reading*) と呼び、「も」「だけ」「さえ」「まで」などのとりたて助詞を含む文が持つ量的解釈の構造について考察する。

これらの助詞については、互いに交換しても一見解釈に違いが見られず、同じ様な量的解釈を持つ例が存在するが、そのような例においても、各助詞は完全に交換可能なわけではなく、文脈により交換できなかったり、微妙に解釈が異なったりする。この事実は、これらの助詞が、使用される状況・文脈によって異なった機能を果たしていることを予想させる。本稿では、特に「さえ」「も」「まで」が交換可能に見える例と、「さえ」「だけ」が交換可能に見える例を取り上げ、それらの例文の持つ解釈の構成要素はどのようなものか、そしてその構成要素はどのように生み出されるのかということを議論する。その議論を通じて、とりたて助詞が持つ語彙的な機能を明らかにし、また、とりたて助詞を含んだ文を解釈する際に、その機能が使用文脈とどのように相互作用を行って量的解釈が生じるのかということを明らかにする。

以上の分析を通して、従来の日本語学で与えられてきたとりたて助詞の用法の分類に対して、新たな視点から説明を与える。

The basic semantic function of 'toritate' (designating)-particles in Japanese, which correspond to so-called 'focus particles' in English, is to designate an object in the context as the focused element, and to quantify the set of its alternatives (contrastive objects).

Among those particles, some induce a kind of scalar readings (interpretations) depending on their context. For these scalar readings, an ordered structure among the set of alternatives is set up. But the ways those readings are induced differ depending on the particle used and the context it is in. These differences lead to further subtle but significant differences among those readings.

In this paper, we examine four of those scalar particles, SAE, MO, MA-DE, and DAKE, and try to clarify the differences among the scalar readings.

キーワード: とりたて助詞 (focus particle)、量的解釈 (scalar reading)、意味論 (semantics)、語用論 (pragmatics)、用法 (usage)、意味機能 (semantic function)

1 はじめに

伝統的な日本語学においては、「とりたて詞」、あるいは「とりたて助詞」を助詞の中の1つの類とする研究・提案がさまざまな形でなされてきている。そのような研究において、とりたて助詞とは、単に統語的な特徴のみによって1つの類とされるわけではなく、むしろ、その意味解釈機能の特徴によってひとつのまとまりをなしていると考えられている。

例えば、寺村 (1991) では、「は」「も」「こそ」「さえ」「まで」「でも」「だって」「しか」「だけ」「ばかり」「など」を「とりたて助詞」の類とし、それらは共通の意味的特徴を持つとして、次のように述べている。

その文のコトの意味とはなれて、いいかえれば、コトの意味の形成自体には参与せず、そのコトと対比させられる何事かを暗示する役目をもっているということである。[寺村 (1991), p. 8]

また、沼田 (1986) でも、統語的な特徴よりも次のような意味解釈的な側面を、とりたて詞の定義として重視している。

とりたて詞とは、文中の種々な要素-これを自者と呼ぶことにする-をとりたて、これに対する他の要素-これを他者と呼ぶことにする-との論理的关系を示す語である。[沼田 (1986), p. 108]

例えば、とりたて助詞の仲間と考えられている「は」「も」「だけ」といった助詞を含む次のような例文を考えてみよう。

(1) 太郎は来た

(2) 太郎も来た

(3) 太郎だけ来た

(1) において、「は」は対照用法を持つとされ、その用法では、単に「太郎が来た」と述べる場合に比べて、「太郎は来たが、他の人（例えば次郎）は来なかった」というような余分な解釈が付随する。同様に、(2) の場合は、「太郎は来たし、他の人（例えば次郎）も来た」、(3) の場合は、「太郎は来たが、他の人は来なかった」という解釈が付随する。それらの「余分な」解釈においては、その助詞でとりたてられた「太郎」以外の人の集合に対する限量が行なわれている。つまり、上記の文の解釈は、単純には、一階述語論理の表現で次のように表すことができる。

(4) a. 太郎が来た

b. $come(t)$

(5) a. 太郎は来た（が、次郎は来なかった）

b. $come(t) \wedge \exists x \in C((x \neq t) \wedge \neg come(x))$

(6) a. 太郎も来た（太郎以外にも来た人がいた）

b. $come(t) \wedge \exists x \in C((x \neq t) \wedge come(x))$

(7) a. 太郎だけ来た（太郎以外の人は来なかった）

b. $come(t) \wedge \forall x \in C((x \neq t) \supset \neg come(x))$

ここで、b で表わされたものが、各 a 文の解釈である。また、 C は、各文が発話された状況において、「太郎」となんらかの意味で対照される事物（人物）の集合を表わす。とりたて助詞が用いられることにより得られる「余分」な解釈は、それぞれの第 2 項で表現されており、これらは、 C 中での太郎 (t) 以外の人物の集合が、「来た」という性質に関してどのような限量関係を持つかということの言明になっている。つまり、とりたて助詞が、それを含む文全体の解釈に対して果たす基本的な機能は、その助詞でとりたてられた対象と、それと何らかの意味で対照をなす物 (alternatives) とを含む領域に対する論理的な限量機能であると考えることができる。

例えば、簡単のために、主語と述語をこれらの助詞で繋いだ文のみを考えれば、これらの助詞の限量機能は、主語と述語で表される個体の集合を A 、 B として、次のような集合間の二項関係として捉えることも可能である。

(8) a. $MO(A, B) \equiv ((A \cap B \neq \phi) \wedge (\overline{A} \cap B \neq \phi))$ b. $DAKE(A, B) \equiv (A \cap \overline{B} = \phi)$ c. $WA(A, B) \equiv ((A \cap B \neq \phi) \wedge (\overline{A} \cap \overline{B} \neq \phi))$

一方、一部のとりたて助詞を含む文の解釈には、上のような単なる論理的限量解釈の他に、その限量が行なわれる領域中に存在する、なんらかの序列 (scale) を前提とする次のような解釈が生じる場合がある。

- (9) 太郎さえ学校に行った
- (10) 社宅さえあれば、勤める (のに)
- (11) 東京まで行った
- (12) 3時まで遊んでいた
- (13) 太郎まで学校に行った
- (14) 役人は第2の人生まで親方日の丸だ

(9) は、「太郎以外はもちろん学校に行ったが、太郎はむしろ学校には行かないと思った。ところがその期待に反して (行かないと思った) 太郎が学校に行った」というような解釈を持ち、その中で、「太郎」は、学校に行く可能性 (あるいは、そのような期待) のある学生の中で最下点に位置する学生である、といった含みがある。当然そこには「学校に行く可能性」に関する「学生」の中での順序づけ (scale) が存在する。(10) は、「最低限社宅があれば、勤める」という解釈になり、「社宅があること」が「勤める」ための条件のうちで、最低位に位置するという含みがある。また、「まで」を用いた文について、(11) (12) には、特になんらかの序列を前提とするような解釈はないが、(13) については、(9) と同様な序列を感じさせる解釈がある。同様に、(14) には、「役人は万事親方日の丸だが、それに加えて第2の人生まで親方日の丸だ」という含みがあり、「第2の人生」が「親方日の丸」であることにに関して最も可能性の低いものだという解釈が背後に存在する。

このような解釈は、「さえ」「まで」といった助詞を持つ文については典型的に現われるが、「も」「だけ」などを含む文についても、文脈によっては同様な解釈が生じる。

- (15) インド人もびっくり
- (16) ごはんも炊けない
- (17) 自転車だけでいける

(15) は、「びっくりしそうなインド人までもがびっくりした」という解釈が強く、人種の中にびっくりしそうな可能性に関して序列が存在してインド人はその最下点に位置する、という含みがある。(16) には、いくつもある家事の中で、ごはんを炊くことがもっともやさしい (最下点である) という含み、(17) には (10) で生じたのと同様な序列、すなわち、行くための道具の序列が存在し、その序列上で自転車が最低であるという含みがある。本稿で

は、とりたて助詞によって限量が行われる領域中に、なんらかの序列 (scale) を仮定する以上のような解釈を、総じて「量的解釈 (scalar reading)」と呼ぶことにする。

沼田 (1986), 寺村 (1991) らは、これらのとりたて助詞を含む文が場合により量的解釈を持つのは、それぞれの助詞が異なった意味 (機能)、あるいは用法を持つことによるとして、とりたて助詞の意味機能、あるいは用法を次のように分類している。

(18)	例文	沼田	寺村
さえ	(9)	意外	基本的意味
	(10)	他者不要	唯一条件
まで	(11), (12)	格助詞／順序助詞	限界点 (基本的意味)
	(13), (14)	意外	強調の意味
も	(6)	他者肯定	基本的意味
	(15), (16)	意外	評価の意味
だけ	(7)	他者否定	基本的意味
	(17)	他者不要	—

しかし、上の表において、同じ「意外」という意味を表わす「さえ」「も」「まで」の場合には、「さえ」を用いた時は必ずその量的解釈が付随するのに対して、「も」を用いた時はそれが付随しない場合もあること、また「さえ」と「まで」を交換してみると、双方の文で量的解釈に微妙なニュアンスの違いが感じられることなど、更に説明を要することもある。また、「他者不要」という意味を表わす「さえ」と「だけ」の場合にも同様に微妙なニュアンスの違いが感じられる。これらは、「各助詞が上の表にまとめたような意味・用法を持つ」ということだけでは説明できず、とりたて助詞を含む文を人間がどのように解釈するのか、そしてその解釈過程に対して、発話状況に固有の文脈あるいは共有知識がどのように影響を与えるのかということを明らかにすることによって初めて説明が可能になるものである。

本稿では、各とりたて助詞が関与する量的解釈について、どのような共通点・相違点があるのかということを検討し、各とりたて助詞の語彙的機能、文脈とのかかわり、そして量的解釈が生み出されるメカニズムを明らかにすることで、(18) で与えられた分類に対して新たな視点から説明を加えることを試みる。

2 「さえ」「も」「まで」:「意外」の用法

「さえ」「も」「まで」には、それらを互いに交換しても、解釈にさほど違いが生じない場合がある。1節の (9) (13) (14) (15) (16) などがそのような例である。代表例として、次の文を考えよう。

(19) a. 太郎さえ学校に行った

- b. 太郎も学校に行った
- c. 太郎まで学校に行った

(19) の各文は、「太郎は（行きそうもないから）学校には行かないと思った。ところがその予想に反して（行かないと思った）太郎が学校に行った」という意外感や、また「（太郎が学校に行ったのだから）ほかの学生、例えば次郎（あるいは太郎以外の学生全員）は、当然学校へ行った」というような解釈を持つ。また、これらの文は、「太郎は、学校に行く可能性のある学生の中で最下点に位置する」といった含みも持つ。まず、ここでは、量的解釈を構成するこれらの解釈要素の関連性を考えてみよう。今挙げた解釈要素を列挙すると、次のようになる。

- (20) a. 太郎が学校に行った
- b. 太郎が学校に行くことは予想できなかった（太郎は、学校に行く可能性が最も低い学生だった）
 - c. 太郎以外の学生が（少なくとも 1 人は）学校に行った
 - d. 皆（行くべき人はすべて）学校に行った

今、単純化のために、「NP (主語)–さえ–Predicate (述語)」「NP (主語)–まで–Predicate (述語)」などといった、「NP (主語)–とりたて助詞–Pred (述語)」という構造を持つ文を考える。

- (21) *NP particle Predicate*
particle = { さえ、まで、も、だけ }

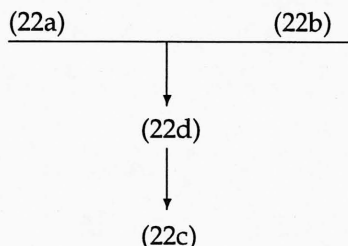
すると、(20) で与えたこれらの文に対する解釈の構成要素は、 $\|NP\|=A$ 、 $\|Predicate\|=P$ として、図式的に次のように表すことができる。

- (22) a. $P(A)$
- b. $\forall x \in C(x \neq A \supset (P(A) \Rightarrow P(x)))$
 - c. $\exists x \in C(x \neq A \wedge P(x))$
 - d. $\forall x \in C(P(x))$

(22a) は、文 (21) の基本的な意味内容（ A が性質 P を満たしていること）を表している。(22b) は、とりたてられるもの A に対して対照される事物 (alternatives) の集合 C の中に、 P に関する可能性の順序が存在して、 A がその順序の最下点に位置するということを表しており、(20b) に対応する。この文では、このような序列の最下点に位置する要素 A について、 P が起こった（満たされた）という、(22a) で表されることを述べることで、話者の意

外感が表現されることになる。(22c)は、いわゆる存在の前提 (existential implicature) で、(20c) に対応する。また、(22d) は (20d) に対応する。

これらの解釈要素は、互いに独立ではない。例えば、‘ \Rightarrow ’ が通常の含意関係と同様にふるまうとすれば、(22a) と (22b) から、(22d) は導くことができる。また、(22c) は (22d) から論理的に導ける。これらの関係を図示すると、次のようになる。



実際は、(22b) における記号 ‘ \Rightarrow ’ は、論理的な含意関係を表している訳ではなく、文脈によってさまざまなスケールを表現するものである。例えば、(19) では、学生の中で、学校へ行く可能性に関する序列を表現し、(15) では、人種の中で、びっくりしそうな可能性に関する序列を表現することになる。

英語の ‘even’ に対する研究では、このスケールを表す関係 ‘ \Rightarrow ’ はさまざまな言葉で表現されている。例えば、Karttunen and Peters (1979) では、‘least likely’、Bennet (1982) では ‘more surprising’、Kay (1991) では ‘more informative’ という関係として定義されている。これらの関係は、ある意味で相互に交換可能である。すなわち、可能性が低いことがおこるということは可能性が高いことがおこることに比べて驚くべきことであるし、また、情報量としても多い。従って、これらは互いに同じ関係を表わしているとも考えることも可能である。¹ ———— ここでは、‘ \Rightarrow ’ をそれらのうちどれかの関係に特定することなく、「前件から後件が普通は導くことができる」というような緩い関連を規定するものとして考えておこう。

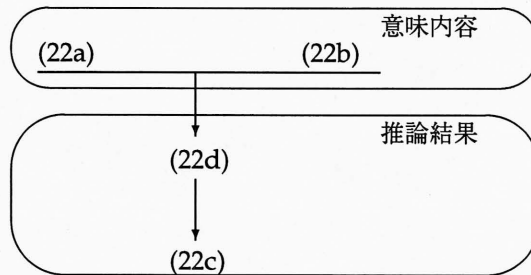
2.1 「さえ」

さて、「さえ」の場合は、対照物に関する単なる論理的限量を表わすような用法がない。つまり、「意外」の用法であれ、「最低条件」の用法であれ、常に量的解釈が付随する。従って、「さえ」はそれ自身で量的解釈を生み出す語彙的な力を持っているものと考えられる。前節で考えたように、(22b) が量的解釈の源泉であるとすれば、「さえ」の意味内容は、語彙的に (22b) を生み出すものとして次のように定義できる。

¹Kay (1991) の ‘more informative’ という関係がより一般的で、Grice 流の会話の原理との関係も明瞭に捉えられることが可能である。

$$(23) \parallel SAE \parallel = \lambda x \lambda P (P(x) \wedge \forall y \in C ((y \neq x) \supset (P(x) \Rightarrow P(y))))$$

これは、以前にも述べたように、「さえ」がとりたてる要素 x に対照的なものの集合 C に、 P に相対的に定義される関係 ' \Rightarrow ' で表される序列を導入し、 x がその序列の最下点に位置するということを意味するものである。上記の意味内容を仮定すれば、(22a) (22b) は構成的に導かれることになる。また、前節の図で示したように、量的解釈の他の要素である (22d) は (22a) (22b) から関係 ' \Rightarrow ' の解釈に依存して推論することが可能であり、(22c) は (22d) から導ける。従って、それらは「さえ」の意味内容に含める必要はない。^{2,3} (22) に示した各解釈要素の関係、および「さえ」を含む文によってそれらがどのように導かれるかということを次に図示する。



2.2 「も」

次に、「も」を用いた文について考えよう。「も」を用いた場合は、必ずしもすべての場合で量的解釈が付随する訳ではない。例えば、次の例では、特別な文脈、例えば「太郎はアルバイトに忙しくて、なかなか学校に行こうとしない」というような文脈がなければ、単なる論理的限量の解釈の方が支配的である。

(24) 太郎も学校へ行った

また、(16) の例においても、次のように文を変えると、量的解釈を得ることが困難になる。

(25) 釜飯も炊けない

²これらが前提 (presupposition) であるのか、慣習的含意 (conventional implicature) であるのか、会話の含意 (conversational implicature) であるのかといった論争についてはここでは議論しない。

³例えば、例え太郎以外の学生が1人も学校に行っていない状況でも、(19a) と同様の発話を自分の子供に行って、次のように学校に行くように促すことも可能である。

(i) 太郎さえ学校に行った。だからあなたも行きなさい。

この例では、前半の文で (22d) を意味してはいない。ここでは、むしろ、「太郎さえ学校に行ったのだから、全員学校に行くべきだ。」といったような解釈が付随している。つまり、この例の場合は、「 \Rightarrow 」には、義務的 (deontic) な概念が付随して、(22d) に類した解釈が生じることになる。

これは、(16)の場合と、量的解釈の前提となる知識が異なっていることによる。つまり、(16)が量的解釈を受けるのは、日本人ならば「ご飯を炊くことは、たやすいことである」といった常識、つまり、「ご飯を炊くことは、数ある家事の中で最もやさしいこと（最下点に位置すること）である」という知識を共有しているからである。それに対して、「釜飯を炊く」ということがたやすいことであるかどうかは、それ程自明ではなく、そのため(25)は量的解釈を受けにくくなる。このような事情は、「も」を用いた慣用表現で量的解釈を持つものを観察してみると一層明瞭になる。

(26) 猿も木から落ちる

(27) 弘法も筆のあやまり

これらは、「も」を含む文が量的解釈を持つ慣用表現の例であるが、これらは、「猿は木登りが上手で、木から落ちる可能性はほとんどない」あるいは「弘法は書道の名人であり、筆をあやまる可能性はほとんどない」といったような常識に支えられ、「(最も間違える可能性が低いものでも間違えるのだから) 誰にでも間違いはあるものだ」という解釈を受けることになる。寺村(1991)では、このような事情を次のように述べている。

逆に、「モ」は「 X サエ… P/P ナイ」において、「 X 」と「 P/P ナイ」の結び付きの意外さが、世間一般の常識になっているときにのみ、「サエ」の代わりをすることができる。そうでない場合、つまり、「 X 」と「 P/P ナイ」の結び付きの意外さが話し手の単なる主観である場合には、「モ」を使うことはできない。[寺村(1991), p. 108]

従って、「さえ」の場合と異なり、量的解釈は、「も」それ自身に付随するというよりは、文脈や前提とする言語外知識の中に、考慮対象についてなんらかの序列(scale)が事前に設定されることによって2次的に導出されると考える方が自然であろう。

では、「さえ」についての議論の際に挙げた(22)の各解釈要素は、「も」の文の場合はどういうように生み出されることになるのだろうか。

「も」を含む文の場合、(6)の例文でも述べたように、常に(22c)という解釈要素が付随する。即ち、量的解釈を持たない例があっても、(22c)を持たない例はない。従って、「も」の意味内容は、語彙的に(22c)を生み出すものとして、次のように定義できる。

(28) $\|MO\| = \lambda x \lambda P (P(x) \wedge \exists y \in C((y \neq x) \wedge P(y)))$

上記の意味内容を仮定すれば、(22a) (22c)は構成的に導かれることになる。また、先に行った議論によれば、それ以外の解釈要素、(22b) (22d)は、文脈や前提とする言語外知識の中に、考慮対象についてなんらかの序列(scale)が事前に設定されていることによって2次的に導かれることになるが、それは次のようにして説明できる。

まず、考慮対象について事前に設定される序列を、次のように表わす。

$$(29) \forall x1, x2 \in C(((P(x1) \Rightarrow P(x2)) \vee (P(x2) \Rightarrow P(x1))) \wedge \\ (((P(x1) \Rightarrow P(x2)) \wedge (P(x2) \Rightarrow P(x1))) \supset x1 = x2))$$

これは、考慮対象 C 中に ' \Rightarrow ' で表わされる全順序関係が設定されていることを示している。⁴

「も」は (28) で示した意味内容を持つと仮定しているので、「も」の文は (22c) なる内容を常に持っている。即ち A 以外の対象で、性質 P を満たすものが存在する。今、それを $A1$ と置けば、(29) より、

$$(30) (P(A1) \Rightarrow P(A)) \vee (P(A) \Rightarrow P(A1))$$

が成立することになる。これは、(29) で導入された序列上で、 $A1$ が A より上位にあるか、下位にあるかのいずれかであることを示している。つまり、「も」を用いた文は、「このような $A1$ に加えて、 A についても $P(A)$ である」と述べる形式であると理解できる。ここで、もし $A1$ が A より下位にあったとすると、

$$(31) P(A1) \Rightarrow P(A)$$

が成立するが、この状況で、 $P(A1)$ を前提として $P(A)$ を表す発話をわざわざ行うということは、明らかに Grice の「量の公準」に違反することになる。即ち、情報量 (informativeness) という基準で考えれば、(31) が成立している以上、 $P(A1)$ が $P(A)$ より情報量が多く (informative)、 $P(A1)$ は既に「も」の語彙的機能により導入される情報であるから、それより情報量の少ない (uninformative) である $P(A)$ を述べることは、会話になんら新しい情報を付け加えることにならないからである。

このことから、 $P(A)$ と述べるからには、

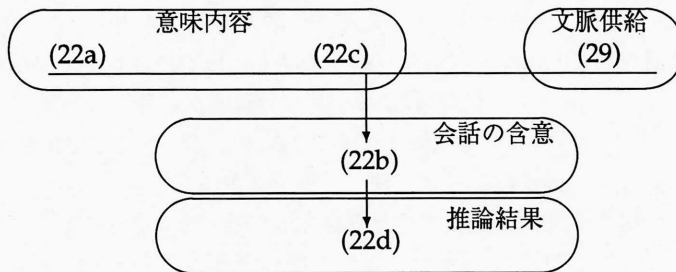
$$(32) P(A) \Rightarrow P(A1)$$

が成立しているはずである。この場合には、 $P(A)$ の方が $P(A1)$ より情報量が多い (informative) ので、 $P(A1)$ を前提にしても $P(A)$ を述べる価値がある。

結局、「も」の文は、 $P(A1)$ であることを既知として、それに加えて $A1$ よりも序列 (scale) 上で下の位置にある A について $P(A)$ である、と述べる形式になる。このことは、「 A が序列上で最下点である」ということを直接には表わさないが、以上の議論は、その序列上に位置されるすべての考慮対象 $A1$ について同様に適用できるので、現在考慮中の対象の中では、 A がその序列上で最下点に位置することになる。つまり、(22b) が導かれる。従って、「も」の場合は、「さえ」の場合と異なり、(22b) は、文脈中に存在する考慮対象に関する序列 (scale) を介して、会話の含意として導かれるものとして説明できる。

以上の事情を図で表すと、次のようになる。

⁴' \Rightarrow ' が全順序である必要はないが、ここでは簡単のためにそうしている。



2.3 「まで」

寺村 (1991) では、(21) の形式を持つ文において、「まで」の基本的意味は、A が時間・空間の延長線上の 1 点を表す場合、P で表される事態が、A を限界として継続的、連続的に存在・生起するということであるとし、更に、A がそのような時間・空間の延長線上の 1 点を表さない場合には、「強調（意外）」の意味を持つとしている。

(33) 3 時まで待つ

(34) 飛行機で仙台まで行く

(35) 犬までおれをばかにする

例えば、(33) (34) では、「まで」は単に時間・空間上の限界点を示すだけであるが、(35) では、「強調（意外）」の意味が出る。ただ、たとえ A が時間・空間上の 1 点を示すものであったとしても、次の例文のように文脈によって、あるいは格助詞を挿入することによって、「強調（意外）」の意味が出る場合もある。

(36) a. 大晦日まで働く

b. 仙台へまで行く

このような事情から、そもそも「まで」には、格助詞と副助詞という異なる語彙項目があるとされる。⁵

しかし、(34) の場合も、(35) の場合も、「まで」でとりたてられた要素 A が、ある範囲の限界点に位置するということを表現するという意味では、「まで」の機能は同じであると考えられることも可能である。ここでは、上で見たような文に登場する「まで」の意味解釈機能は同一であると仮定し、「ある範囲の限界点」という意味が、どのように「強調（意外）」の意味へと転化するのかということを考えてみよう。

⁵ 沼田 (1986) ではさらに格助詞以外の「まで」については順序助詞、形式副詞、とりたて詞の 3 つが存在するとしている。

今述べたように、「まで」の機能は「ある範囲の限界点を指示する」ものとして考えられるが、上の2つの例(34)(35)においては、その「範囲」としてどのようなものを設定するかということが異なっている。つまり、(34)では、単に「仙台」が時間・空間上での範囲の限界点であり、「行く」という行為がその限界点まで継続するということを示しているのに対して、(35)では、「犬」が、「まで」の後に続く述語「ばかにする」に相対的に規定される、「ばかにされる可能性」の、ある序列上での限界点を示している。そもそも、時間・空間、あるいは数・数量といったものには、「範囲」という概念が自然に規定されるのに対して、一般的な名詞、上の例でいえば「犬」については、どのような「範囲」が規定されるかということはそれほど自明なことではない。そのためには、「犬」に対してそれを延長する概念の列、例えば「動物」「生物」といった上位種概念の列や、「猫」「小鳥」「金魚」といった愛玩動物の列など、その文脈に即した列を考慮する必要がある。

(37) 太郎まで学校に行った

(37)を、話者があるクラスの出席簿を見ながら発話したという状況では、出席番号順に「花子」「智子」「次郎」「太郎」「三郎」という列が自然に想起される。文脈からそのような「範囲」が設定できれば、この文における「まで」は、「意外」としてではなく、単にその範囲の限界を示すものとして解釈することが可能である。しかし、そのような文脈がない場合には、多くの場合、(37)は「意外」の解釈を受ける。

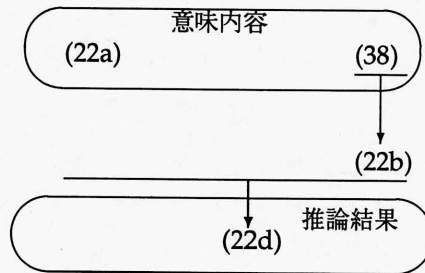
そのような自然な、あるいは文脈に依存した「範囲」が設定されない場合には、「まで」の語彙的機能である、「ある範囲の限界点を示す」というものを満たすために、聴者の側でもっともらしい「範囲」を想定する必要が生じる。そのような「範囲」として簡明に設定できるのが、その後に続く述語 P に相対的に規定される「 P である可能性」についての序列の範囲なのであろう。つまり、「まで」が、「範囲」を自然に想起できないような名詞に接続した場合には特に、「意外」解釈のもとになる「 P である可能性」の序列を、 A を限界点におくべき「範囲」として設定することになる。

「ある範囲の限界点を示す」という「まで」の語彙的機能を、次のような解釈要素を導入するものとして表現しよう。

(38) $\forall x \in C(x \neq A \supset A < x)$

(22b)では、 P に相対的に定義される「可能性の序列」を導入することを表現しているのに対し、(38)は、 A が、単に A の対照物の集合 C 中に導入されるある序列の限界点を示していると述べるものである。

「意外」解釈は、 A の性質などによって、(38)から(22b)が聴者によって再解釈される場合に生じることになる。以上の事情を図で表すと、次のようになる。



3 「さえ」「だけ」:「最低条件・他者不要」の用法

1節で述べたように、沼田 (1986), 寺村 (1991) では、次の文における「さえ」は、「意外」の「さえ」とは違う意味機能、用法を持つとされている。

(39) 社宅さえあれば、勤める (のに)

確かに、この文の持つ量的解釈は、2.1で取り上げた「意外」の「さえ」とは様相がかなり異なる。この違いは、次のように「さえ」を「まで」「も」「だけ」と交換して構成した文を考えるとさらに明瞭になる。

- (40) a. 社宅さえあれば、勤める
 b. 社宅もあれば、勤める
 c. 社宅まであれば、勤める
 d. 社宅だけあれば、勤める

- (41) a. 社宅さえある
 b. 社宅もある
 c. 社宅まである
 d. 社宅だけある

(40a) は、「社宅があれば、他のものがなくとも、勤める」といった「最低条件・他者不要」解釈を持つが、「さえ」を「も」「まで」と言い替えた (40b,c) はそのような解釈を持たない。この例では、「さえ」はむしろ「だけ」と言い替えることができ、(40d) は (40a) と殆ど同じ解釈を持つ。一方、(41) では、前節で観察したものと同様に、「さえ」は「も」「まで」と言い替えることができるが、「だけ」とは言い替えられない。(41d) は (41a) とは解釈が明らかに異なる。従って、(40a) の持つ「最低条件・他者不要」解釈では、「さえ」が全体の文の解釈に及ぼす影響は、「意外」用法の「さえ」とは異なることが予想される。

また、次に挙げる例も同様である。

- (42) a. 勤務条件さえ整えば、職場に復帰する
 b. 基本ルールさえ分かれば、自分たちだけでのびのびとプレーする
 c. フジモリ氏のような二世でも能力さえあれば大統領に選ばれる国だ

これらは、皆、前件で述べられた条件が最低成立すれば、他の条件は必要ないといった、「最低条件・他者不要」解釈を持つ。これらの例からわかるように、(40) が持つ量的解釈は、条件節中に「さえ」が用いられた条件文の場合に典型的に現われる。このような例文を更に観察してみると、「さえ」を用いた文が「最低条件・他者不要」という量的解釈を持つのは、そのような場合に限られることに気づく。従って、上で見た現象では、「条件文」の解釈と「さえ」の機能とが深く関わっているものと予想される。

また、「最低条件・他者不要」解釈は、「だけ」を用いた (17a) のような文でも生じることが観察されている (久野 1983, 森田 1971)。

- (43) a. 自転車だけで行ける
 b. 自転車さえあれば行ける

この場合、「だけ」は逆に「さえ」を用いて (43b) のように言い替えることが可能である。

筆者らは、Harada and Noguchi (1992), 野口・原田 (1993) において、可能述語と「で節」が共起する (43a) のような文では、条件文解釈が自然に生じるということを指摘し、その解釈のもとで、「他者不要」解釈が導かれるメカニズムについて報告した。つまり、(43a) では条件文が陽に用いられているわけではないが、上の言い替えができることから明らかなように、(43a) の「最低条件・他者不要」解釈には条件文としての解釈が強く関与していると考えられる。

本節では、以上、「さえ」「だけ」を用いた文が共通に持つ「最低条件・他者不要」という量的解釈について、条件文との関連を中心に議論する。

3.1 「さえ」

沼田 (1986) では、「最低条件・他者不要」の「さえ」は「意外」の「さえ」と違って「他者不要」をその意味にすること、また、「意外」／「最低条件・他者不要」両者の解釈を持ちうる次のような例文が存在することを、2つの「さえ」があることの根拠としている。

- (44) a. 学校に行けさえするなら、喜んで働きます
 b. 住み込みだから食、住の心配はない。それどころか十分な給料がもらえ、その上学校に行けさえするなら、喜んで働きます。

(44a) は「最低条件・他者不要」解釈を持つのに対し、(44b) は「意外」の解釈を持つ。

しかし、「最低条件・他者不要」解釈が、「さえ」が条件節に用いられた場合にのみ現われるという事実は、単に「さえ」に2つの意味解釈機能があるということでは説明できない。

条件節に現われる「さえ」に限って、通常とは違う特別な機能を持つとするのは、説明としては逆に ad hoc にすぎる。むしろ、条件節に「さえ」が現われた時には、「さえ」と条件文が何らかの相互作用を行って通常とは違う解釈を生んでいると考えるほうが自然であろう。

本稿の冒頭にも述べたように、とりたて助詞は、とりたてられた要素に対照的な事物の集合についての限量機能を持つ、いわば限量子の一種であり、一般の限量子と同様に、それが作用する意味的なスコープが全体の文の解釈に影響する。また、条件文を構成する「～ならば～」という表現も、同様にそれが作用する意味的なスコープを持つ。従って、条件文の中に「さえ」が現われた (40) (44) のような文では、それぞれの表現が作用する意味的なスコープの関係が、全体の文の解釈に大きく影響してくるはずである。そこで、(40a) について、「さえ」の意味内容は、(23) と同一であると仮定して、「さえ」が「～ならば～」に対して広いスコープをとった場合と、狭いスコープをとった場合の文全体の意味内容を考えると、それらはそれぞれ次のように表現できる。⁶

(45) a. (wide scope)

$$\begin{aligned} & \|SAE\|(\text{社宅がある}) (\lambda P(\text{if } P \text{ then 勤める})) = \\ & (\text{if 社宅がある then 勤める}) \wedge \\ & \forall R \in C(R \neq \text{社宅がある} \supset ((\text{if 社宅がある then 勤める}) \Rightarrow (\text{if } R \text{ then 勤める}))) \end{aligned}$$

b. (narrow scope)

$$\begin{aligned} & (\text{if } \|SAE\|(\text{社宅}) (\lambda x(x \text{ がある})) \text{ then 勤める}) = \\ & (\text{if } (\text{社宅がある} \wedge \forall y(y \neq \text{社宅} \supset (\text{社宅がある} \Rightarrow y \text{ がある}))) \text{ then 勤める}) \end{aligned}$$

(45a) は、「さえ」が「～ならば～」に対して広いスコープをとった場合の解釈であり、これは、「社宅がある」ことが「勤める」ための条件の序列の中で最低位に位置するという「最低条件」の解釈を正しく表現している。

また、2.1において、「さえ」を用いた場合に推論により導かれるとされた解釈要素 (22c,d) は、この広いスコープの解釈の場合、次のように表現できる。

(46) a. $\exists R \in C((R \neq (\text{社宅がある})) \wedge (\text{if } R \text{ then 勤める}))$

b. $\forall R \in C(\text{if } R \text{ then 勤める})$

(46b) は、「社宅があれば勤めるのだから、それよりもよい他の条件があれば当然勤める」という解釈を表現しており、(40a) が持つ解釈を的確に表わしている。

従って、「最低条件」の解釈は、条件節中の「さえ」が、「～ならば～」よりも広い意味的なスコープをとることによって生じる解釈であると考えることが可能である。つまり、(40a) (44a) などの文では、「さえ」のスコープが文全体に及ぶことによって、とりたてられる要素

⁶ 「～ならば～」の意味内容は、 $\lambda P \lambda Q (\text{if } P \text{ then } Q)$ と考えておく。

は前件で表現される条件命題全体となり、それが「さえ」によってある序列上の最低位に位置付けられることになる。このことは、何故「最低条件」の「さえ」が条件文とだけ共起するのかということに対して回答を与えるものでもある。

一方、(45b) は、「さえ」が「～ならば～」よりも狭いスコープをとった場合の解釈であり、「社宅」が「ある」ものの序列の中で最低位に位置するということが「勤める」ための条件になっているということを表現しているが、これは直観的には理解不能であり、実際に、(40a) はこのような解釈を持たない。

それでは、文脈により解釈が曖昧になる (44) のような例は何故生じるのだろうか。再び (44b) をよく考えてみると、この文はこのままでは多少すわりが悪く、次のように「という」を補うと、すわりがよくなる。

- (47) 住み込みだから食、住の心配はない。それどころか十分な給料がもらえ、その上学校に行けさえする (という) なら、喜んで働きます。

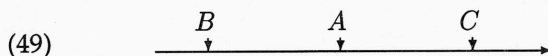
この形式は、「という」という表現を挿入することによって、明らかに「さえ」が含まれる条件節内で「さえ」を解釈させる形式であり、上で挙げた狭いスコープでの解釈が生じやすくなる。また、この場合、解釈は「住み込みで、かつ十分な給料がもらえて、その上学校に行けるのだから、もちろん喜んで働きます」というものになり、文形式自体は条件文であるが、解釈としては、前件が真である理由文的な解釈が強くなる。従って、(44) のような文では、(44a) では「さえ」が広いスコープで解釈され、(44b) のような文脈で用いられると「さえ」の狭いスコープの解釈が生じやすくなるということによって、解釈の多様性が生じると考えることができる。

以上、「最低条件・他者不要」解釈を持つ「さえ」について、「最低条件」の解釈は「さえ」が条件文で用いられた時に、「さえ」と「～ならば～」の意味的スコープの交代によって生じるものとして説明できる。それでは、「他者不要」解釈についてはどうだろうか。

上で述べたように、「最低条件」解釈は、「さえ」が「～ならば～」よりも広い意味的スコープをとることによって生じていた。これは、(40a) を次のように言い替えた解釈と同じである。

- (48) 社宅がありさえすれば、勤める

即ち、「社宅があること」さえ成り立っていれば、それで「勤めること」の十分条件になっている、という解釈である。この場合に「さえ」が導入する序列は、「勤めるために十分である」ということに関する条件の序列である。一般に、あることを成立させるための十分条件 A,B,C の間に、(49) に示すような序列 ($B < A < C$) がある場合、(50) に示すような自然な推論が成立する。



- (50) a. $(A \text{ が十分}) \supset \forall x ((x \geq A) \supset (x \text{ が十分}))$
 b. $(A \text{ が十分}) \supset \forall x ((x > A) \supset \neg(x \text{ が必要}))$

(40a) の例に即して言えば、「社宅があること」が成立していれば、それだけで「勤める」ための条件としては十分であるから、条件の序列上で「社宅があること」以上の条件であれば当然「勤める」ための条件としては十分であり、かつ必要ないということになる。また、「社宅があること」という条件は、現在考えられている条件の中で最下点に位置するから、それ以外の条件はすべて「社宅があること」以上の条件になっている。即ち、「社宅があること」以外の条件は、全て、「勤める」ためには必要でないということになる。これは、沼田 (1986) の言う「他者不要」という解釈を正確に表現している。

結局、「他者不要」という解釈は、「さえ」と「～ならば～」が共起する際に生じる「最低条件」解釈に付随して、「さえ」によって導入される条件の序列上での推論によって導かれるということになる。

3.2 「だけ」

一方、「だけ」を含み、「最低条件・他者不要」解釈を持つ (17) (40d) のような文については、「だけ」と「～ならば～」との意味的スコープの相互作用ということで説明することはできない。なぜなら、「だけ」は「さえ」とは語彙的な機能が異なるからである。通常、「だけ」はとりたてられた要素以外の要素を排除するという機能を持つ。そのような機能は、「だけ」の意味内容を次のようにすることで表現できる。

$$(51) \quad \|DAKE\| = \lambda x \lambda P (P(x) \wedge \forall y \in C (P(y) \supset y = x))$$

この意味内容を仮定して、(40d) について、「さえ」の時の議論と同様に、「だけ」が「～ならば～」に対して広いスコープをとった場合と、狭いスコープをとった場合の文全体の意味内容を考えると、それらはそれぞれ次のようになる。

- (52) a. (wide scope)

$$\|DAKE\|(\text{社宅がある}) (\lambda P (\text{if } P \text{ then 勤める})) =$$

$$(\text{if 社宅がある then 勤める}) \wedge \forall R \in C ((\text{if } R \text{ then 勤める}) \supset R = (\text{社宅がある}))$$
 b. (narrow scope)

$$(\text{if } \|DAKE\|(\text{社宅}) (\lambda x (x \text{ がある})) \text{ then 勤める}) =$$

$$(\text{if } (\text{社宅がある} \wedge \forall y (y \text{ がある} \supset y = \text{社宅})) \text{ then 勤める})$$

(52a) は「だけ」が「～ならば～」に対して広いスコープをとった場合の解釈であり、「社宅がある」ことが「勤める」ための唯一の条件であることを表現している。これは、「最低条件・他者不要」の解釈にはなり得ない。従って、「さえ」の場合とは違って、「最低条件・

他者不要」の解釈を与えるのは「だけ」が「～ならば～」に対して狭いスコープをとる場合ということになるが、(52b)は「社宅だけがある」ことが「勤める」ための条件であることを表現しており、そのままでは「最低条件」という解釈にはならない。

沼田 (1994) は、「だけ」が条件節に現われた場合の解釈についての詳細な観察を行い、3通りの読みが存在すること、条件文の表現によって読み異なる分布が生じることなどを報告している。その報告では、その3通りの解釈を「他条件否定」「他者不要」「他者否定条件」と読んでいるが、「他条件否定」とは、本稿で言う「だけ」の広いスコープの解釈であり、「他者否定条件」とは、狭いスコープの解釈に対応している。「他者不要」とは、それらのどちらでもなく、「他の条件は必要ない」という解釈である。

- (53) a. 注射だけ打つと治る
b. 注射だけ打てば治る
c. 注射だけで治る

例えば、(53)では、「他者条件否定」とは、「注射でだけ治って、注射以外の手段では治らない」という解釈、「他者否定条件」とは、「注射だけ打って、他の手段を用いなければ治る」という解釈、「他者不要」とは、「注射だけ打てば治り、他の手段は必要ない」という解釈である。沼田 (1994) では、(53a)は「他者否定条件」と「他者不要」、(53b)は「他者否定条件」、(53c)は「他条件否定」と「他者不要」の解釈を持つとされている。この事情を次の表に示す。

(54)	他条件否定 (wide scope)	他者不要	他者否定条件 (narrow scope)
(53a)	－	－	＋
(53b)	－	＋	＋
(53c)	＋	＋	－

この表は、どのような表現で条件文を構成するかということによって、可能な解釈が異なってくることに、「他者不要」解釈は、「だけ」が条件節を構成する表現より広い意味的スコープをとる解釈でも、狭いスコープをとる解釈でもなく、「だけ」のスコープを、いわばその中間的な場所にとる場合に生じるものであるということを示している。それでは、「だけ」が関与する「他者不要」解釈はどのように生じると考えるべきだろうか。

そもそも、「だけ」が関与しない条件文にも、「他者不要」なる解釈は存在する。

- (55) 注射を打てば治る

例えば、(55)は、「注射を打つことが、治るための十分条件だ」という解釈を持つので、当然「それ以上条件に付け足す必要はない」といったような含みを持っている。その含みと、(53b)が持つ「他者不要」解釈とは違いがあるのかどうか、いまひとつはっきりしない。

一方、「最低条件」の解釈は、次のようにして生じると考えることができる。今、(53b) と (55) とを比較してみると、(53b) は、「だけ」を用いて「注射」をとりたてることによって、「注射を打つ」と比較される対象が明瞭になるという効果はありそうである。ここで、比較される対象とは、例えば、

- (56) a. 注射と投薬
b. 注射と投薬と通院
c. 注射と投薬と入院

というように、他の手段との組合せからなる条件である。このような条件集合には、その組合せ方によって、自然な序列が存在する。通常は、ある条件を部分集合として持つような条件は、前者に比べて「治す」という効果において可能性の高い、すなわち治しやすいものになる。⁷ そのような序列の上で、「注射だけ」からなる条件は最下点に位置することになり、「最低条件」解釈が導かれると考えることができる。

いずれにせよ、「だけ」が関わる「最低条件・他者不要」解釈については、今後さらに検討、分析が必要である。

4 おわりに

本稿では、とりたて助詞が関与して生じる量的解釈について考察し、それがどのようなメカニズムで生じるのかということ进行分析した。特に、「意外」の用法とされた「さえ」「も」「まで」について、および「最低条件・他者不要」の用法とされた「さえ」「だけ」についてそれぞれ観察して、それらのとりたて助詞が文全体の解釈に対してどのように機能し、また文脈・共有知識といった状況に依存した情報がどのように関与するのかということ进行分析した。

本稿で得られた暫定的な結論を以下に述べる。

- 「さえ」の語彙的な機能は、「考慮対象中に、「さえ」の意味的スコープ内の述語で表される性質に相対的に序列 (scale) を導入して、とりたてた要素 (focus) がその最下点に位置する」と述べることである。
- 「さえ」を含む文の持つ「最低条件・他者不要」解釈は、条件節に「さえ」が用いられた時に典型的に生じ、「最低条件」解釈は、「さえ」が条件文「～ならば～」よりも広い意味的スコープをとることによって意味内容として導出され、「他者不要」解釈は、条件の序列上での必要・十分条件に関する推論により生じる。

⁷Kay (1991) には、'plus' を用いて同様な序列に基づく量的解釈が生じる例が紹介されている。

(i) a. George drank a little wine, a little brandy, a little rum, a little calvados, plus a little armagnac.
b. George drank a little wine, a little brandy, a little rum, a little calvados, even a little armagnac.

(7a) は、(7b) と同様な量的解釈を持つが、そこでは、それぞれの酒類についての序列が問題にされているわけではなく、何種類の酒類を飲むかという、種類の数についての序列が問題にされている。

- 「も」の語彙的な機能は、「考慮対象中に、とりたてた要素 (focus) 以外の要素で、「も」の意味的スコープ内の述語で表される性質を満たすものが存在する」と述べることである。
- 「も」を含む文の持つ「意外」解釈は、文脈あるいは共有知識として考慮対象中に序列が予め存在した場合に、「も」文の持つ意味内容に対する会話の含意として生じる。
- 「まで」の語彙的な機能は、「考慮対象中に存在するなんらかの範囲に対して、とりたてた要素 (focus) がその限界点に位置する」と述べることである。
- 「まで」を含む文の持つ「意外」解釈は、「考慮対象中に存在するなんらかの範囲」を、「まで」の意味的スコープ内の述語で表される性質に相対的に規定される序列 (scale) 」と再解釈することによって生じる。
- 「だけ」の語彙的な機能は、「考慮対象中に、とりたてた要素 (focus) 以外の要素で、「だけ」の意味的スコープ内の述語で表される性質を満たすものが存在しない」と述べることである。
- 「だけ」を含む文の持つ「最低条件・他者不要」解釈は、条件節に「だけ」が用いられた場合、あるいは暗に条件文としての解釈が行なわれる場合（「だけで+可能述語」などのケース）に典型的に生じる。それらのうち、「最低条件」解釈は、「だけ」が明瞭にする条件集合に内在する自然な序列に関して生じる。

等しく「意外」といった解釈を持つとされた「さえ」「も」「だけ」の例については、「さえ」はその語彙的な機能として「意外」解釈のもととなる序列を導入するのに対して、「も」は、その序列を文脈に委ね、会話の規則に基づいた推論によって「意外」解釈を導く点、「まで」は、その序列の再解釈を聴者に委ねる点に、解釈過程の違いが見られる。

また、等しく「最低条件・他者不要」といった解釈を持つとされた「さえ」「だけ」の例については、それらが条件文で用いられることによって、条件文の解釈に依存して生ずること、「さえ」の場合は「最低条件」解釈がその語彙的な機能によって生じ、「他者不要」解釈は条件文に付随する自然な推論によって生じることを指摘した。

結局、従来与えられてきた、それぞれの助詞の持つ意味解釈機能・用法の分類は、助詞の語彙的機能と人間の解釈過程によって、次の表のように説明し直すことができると考える。

(57)		例文	沼田	本稿の結論
	さえ	(9)	意外	語彙的機能による
		(10)	他者不要	語彙的に導入される条件の 序列上での推論による
	まで	(11), (12)	格助詞／順序助詞	語彙的機能による
		(13), (14)	意外	語彙的機能+序列の再解釈 による
	も	(6)	他者肯定	語彙的機能による
		(15), (16), (58)	意外	序列が文脈に供給されるこ とによる会話の含意
	だけ	(7)	他者否定	語彙的機能による
		(17), (59)	他者不要	条件文解釈が生む自然な序 列上での推論による

「だけ」を含む文の「他者不要」解釈については、条件文の形式によって解釈が分布するという問題もあり、それぞれの条件文の解釈過程の分析と合わせて、更に検討が必要である。

また、とりたて助詞を含む文が量的解釈を持つ例には、次のように「数詞＋とりたて助詞」を含むものもある。

(58) その講演会には、500 人も来た

(59) その講演会には、500 人だけ来た

(58) には、500 人という人数が予想された参加者の人数よりも多く、最大限度であるという含みがあり、また、(59) は「500 人より多くの人は来なかった」という *no more than* の読みとなる。これらの例については、数詞自体が序列を表現しているために、量的解釈の構造が多少異なることが予想され、数詞そのものの持つ機能も明らかにする必要がある。本稿では、これらの例文については十分な準備ができなかったために、議論を行わなかった。これについても今後の課題としたい。

参考文献

Bennet, J. (1982). Even if. *Linguistics and Philosophy*, 5, 403–418.

Harada, Y. & Noguchi, N. (1992). On the Semantics and Pragmatics of DAKE. In Barker, C. & Dowty, D. (Eds.), *Proceedings of the second conference on Semantics and Linguistic Theory*, pp. 125–144.

寺村秀夫 (1991). 『日本語のシンタクスと意味 III』. くろしお出版.

- Karttunen, L. & Peters, S. (1979). Conventional Implicature. In Oh, C.-K. & Dinneen, D. (Eds.), *Syntax and Semantics, Vol.11*, pp. 1-56. Academic Press, New York.
- Kay, P. (1991). Even. *Linguistics and Philosophy*, **16**, 589-611.
- 野口直彦・原田康也 (1993). 「「だけ」についての意味 論的／語用論的考察」. 『第 10 回日本認知科学会予稿集』.
- 久野 暉 (1983). 『新日本文法研究』. 大修館書店.
- 沼田善子 (1986). 『いわゆる日本語助詞の研究』, とりたて詞 章. 凡人社.
- 沼田善子 (1994). 「とりたて詞「だけ」と条件節をめぐる解釈の二義性」. 理論言語研究会発表 (於早稲田大学).
- 森田良行 (1971). 「だけ、ばかりの用法」. 『早稲田大学語学研究所紀要』, **10**, 1-27.